
MAHORA不思議ドリンク研究会

ヨシュア13世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MAHORA不思議ドリンク研究会

【Nコード】

N3819T

【作者名】

ヨシユア13世

【あらすじ】

最近大人気の夕映つちに焦点を当ててみました。更新は非常に不定期です。

そのうえ、段々タイトルとかけ離れていくかと思えます……。

あと、作中に作者が適当に建物とか作ってますがお気になさらず。

名前の決定に伴い、話を少し弄ります。そのところはご了承ください。

0 時間目 これが噂の？（前書き）

原作一巻から約1年ほど前のお話となっております。

自分では書くのには慣れているつもりですが、変なところがあったら遠慮なくどしどし。

0 時間目 これが噂の？

ようやく酷暑が過ぎ去ったかと思いきや、残暑が厳しく未だにうだるような気温の9月の半ば。ここ麻帆良学園で……俺が中一の時、全ては始まった。 気がする。

「なあなあ、知ってるか？ 最近、世界樹広場の自販機に変なジュースが売られてるらしいぜ？」

放課後、そこそこに親しい友人が話しかけてきた。

「へえ、それって美味しいのか？」

ちよつと気になるな。変って意味が分からないところが興味をそそられる。

「さあ？ 俺も飲んだことないし。てか、そんな怪しいもん飲みたくねえだろ」

「そうか？ 面白そうじゃねーか」

俺の判断基準は全て面白いか面白くないかだからな。ちよつどいい事に喉も渴いてるし、飲みに行ってみるか。

「相変わらずチャレンジャーだなあ。お前この間、超不思議カレー食べて一週間腹痛で休んだばかりだったのに」

「そのギャンブルさが面白いんだよ」

まあ……あのカレー（青色）はさすがにこりこりだが。食べたらか
レーの味は一切しなくて、ぬるってして、ねちよつとした食感とバ
ナナをラムネに漬けてコーラで焼いた後、リンゴジャムで煮込んだ
様な味がした（実際にそんなもん食べた事ないけど）。食い物系は
駄目だ。生死に関わる。

「ま、飲んだら感想教えてくれや」

「オーケー」

そうして、件のジュースがあると言う自販機へ向かう。

「つか〜、相変わらずここ『麻帆良学園』は広い！」

……説明臭いと思った諸君。それは正解だ。なんでかって？ そり
ゃ、作syゲフンゲフン！ 神の意志だよ。じゃ、ついでに軽く説
明しよう。俺が通っている麻帆良学園は全寮制で幼稚園から大学ま
でが一つの学園にある、巨大な学園都市だ。詳しくは知らないけど
ヨーロッパの街並みを参考にして作られたらしい。男子と女子で校
舎の場所が別れていて、ほぼ真逆の方向にある。それでも寮は割と
近くにあるので、男子ばかり女子ばかりと言う状況は無いよう
だ。女子の方は知らないが、こちらの寮はかなり広い。それこそど
こかのホテル並みの広さを持っている。有名所は何故か湖の真ん中
にポツンと立っている浮島とそこに立っている建物。中は巨大な図
書館となっているらしく、通称図書館島と呼ばれている。もう一つ
は俺が今向かっている世界樹広場にそびえ立っている大木、その名
を世界樹。これまた詳しくは知らないがたまに光るらしい。不思議
な樹だ。そしてその世界樹広場は結構告白の名所とも言われている、
『世界樹広場で告白したら必ず成功する』と言ったジンクスまであ
るくらい。ちなみに俺はそんなものには頼らない派だ。まあ、俺の

事は置いていて……超大雑把に説明するとこんな感じだ。麻帆良学園と言うのは。

「おーおー、運動部が練習してるのかあ」

九月も半分くらい過ぎたけどまだまだ暑い。なのに良くやるよ……。男子も女子も元気だねえ。

「にしても変なジュースかあ……楽しみだ」

そうして世界樹広場に着き、自販機を探す。

「えーっと……あ、あつた」

自販機は普通だが……。

「……ん？」

そこに『黒酢コーラ』と書かれた物があった。

「ほう。これが例の不思議ジュースか」

ラベルにMAHORAって書いてあるし、まず間違いないだろう。

「130円で……紙パックの割に高いな、おい」

文句を言いつつも、硬貨を投入し『黒酢コーラ』のボタンを押す。

「あれ、売り切れ？」

ひょっとして人気商品なのか？ もしくは絶対量が少ないのか……。

「ま、ラッキーと思っておくか」

踵を返して帰ろうとすると

「……………売り、切れ……………くう！ この私としたことが何たる失態です」

背が低く、髪は濃紫で耳辺りから下を編んでいて、広めの額の女の子が先ほど俺が買った黒酢コーラの売り切れランプを見て悔しがっていた。

「えーと……………」

これ、譲ってあげるべきか？ 見たところまだ初等部みたいだし……。中等部として大人なところを見せるか？

「え？ ……ああつ！ それは『黒酢コーラ』ではありませんか！

「あ、ああ。俺が買ったので最後だったんだけど……………いる？」

「いえ、そんな見ず知らずの方にもらう理由がないです」

最近の小学生って礼儀正しいんだなあ。俺の時（一年前）はもっとやんちゃしてたけど。

「まあ、ほら、中等部から初等部に対してのささやかなプレゼントって事で」

「？ 誰が初等部ですか？」

「ん？ 君、初等部の生徒だろ？」

どう考えても中等部ではないだろう。初等部4年くらいかな？

「失礼な！ 確かに背が低い事は認めるですが、これでも中等部1年です！」

「ええ つ！？ マジで!？」

いやいや、あり得ないだろう。普通同年代の女子でももっと背が高いハズだろう。

「嘘だと思っならコレを見るです」

そう言っって革のケースに入っった物を見せてきた。

「麻帆良学園女子中等部1 - B ……マジだ」

イツツ、ミラコー！（。。。）

「これで分かつたですか。まったく……」

とても無然とした顔でこちらを見てきた。

「悪かつたよ。んじゃ、詫びにコレっって事で」

黒酢コーラを彼女に差し出す。

「いや、ですから最初にも言っただ通り見ず知らずの方にジュースを

もらう理由がないです。また日を改めて出向くから良いです」

「俺、男子中等部1-C二見隼人だ」

「え？ あ、綾瀬夕映ですが……」

律儀にも返してくれた。

「これで知り合いだ。で、俺が悪い事をした思ったからその詫びに黒酢コーラを差し出す。OK？」

「……貴方のような変わった人は見た事がないです」

「まあ、確かに変人とは良く言われるけど」

「一体俺のどこがヘンだと言うのか？ これが俺の普通なんだが……」。

「変人な貴方に質問があります」

「お前結構失礼だな!？」

「先ほどのお返しです。それで、質問ですが……貴方もMAHORAドリンクのファンなのですか？」

お返しって……ジュースやったのにその仕打ちは如何なものか？
いや、まあ……別に良いけどさ。

「MAHORAドリンクってこれか。……どうだろうな？ 初めて買ったし」

「ほほう。では、MAHORAドリンクデビューですね」

……。

「綾瀬は結構飲んでるのか？」

「ええ。ですがまだMAHORAドリンクシリーズを完飲したわけではないですね」

「ふう……ん。俺、超不思議カレーなら食ったことあるぞ」

少し自慢げに言ってみる。

「なんと！ あの幻のメニューを食したですか！」

ある意味幻かもな……食った奴が腹壊すんだから。

「おう。ちょっと機会があったから食ってみたぜ」

「どうでしたか？」

「そうだなあ。色は青色でカレーの味は一切しなくて、ぬるってして、ねちよつとした食感とバナナをラムネに漬けてコーラで焼いた後、リンゴジャムで煮込んだ様な味がしたな。んで、一週間ほど腹壊した」

「……」

「うわあ……」「コイツ馬鹿なんじゃないの？」「って目で見てやがるよ。」

「嘘じゃねーぞ？」

「ですが、そんな話信じられないです」

確かに。俺も最初に聞いた時は半信半疑だったけど。

「よし！　そこまで言うなら今度食わしてやる！」

「良いでしょう。私も超不思議カレーには興味がありましたし。それではアドレスを交換するです。準備が出来たら連絡してください」

「OK。後で吠え面かくなよ？」

「望むところです」

あれ？　そう言えば俺……女の子とアドレス交換したの初めてかも知れない。……まあ、だからどうこうってわけじゃないけどさ。

「では私は部活に行くので失礼するです」

丁寧に礼をして去っていった。

「おう。またな」

綾瀬夕映……か。あの夕映ってゆえって読むんだな。ま、何にせよ……これから面白くなりそうだな！　見た目は小学生でも一応同級生の女子とアドレス交換できたし！

いや、さっきも言ったけど変な事するわけじゃないからな？ そっ、勘違いしないように！

0時間目 これが噂の？（後書き）

パ「パルとー！」

の「の、のどかの〜」

パ・の「0時間目座談会〜！」

パ「いや〜、まさかあの夕映が男とアドレス交換してたなんて驚きね〜」

の「そ、そうだねー（理由が夕映らしいとは思っけど……）」

パ「相手の男はどんなのか見た事ないけどまあその内会っでしょ」

の「あうあう……」

パ「だーいじょうぶだったのどか。少なくとも夕映がアドレス交換するくらいだから変な人じゃないって」

の「う、うん。そうだよね……」

パ「それに、のどかも男性恐怖症を克服するチャンスかも知れないしさ」

の「だ、だと良いけどー……」

パ「ま、とりあえず今日はこんなところかしらね〜。で、誤字脱字・批判・アドバイスなど……感想くれたら嬉しいなあ〜」

の「あ、え、えと……お、お待ちしています……」

1 時間目 恐怖！ 超不思議カレー（前書き）

主人公の名前を自分で好きにしてもらおう。……気に入ってもらえる
だろうかこの企画。

1時間目 恐怖！ 超不思議カレー

side - 夕映

「むう……」

黒酢コーラ……あのまま流れで受け取ってしまいました。やはり自分で手に入れないと感動が少ないですね。

「せめて代金くらいは返すですか」

確かに初等部の子だと言われ腹が立ったのは事実ですが、やはりコレをもらつ理由にはならないですね。

「そう言えば……」

男性とアドレスを交換したのは初めてのようない感じがするです。中等部は男子と女子で別れるですし……。

「だからと言って何かあるわけではないですが」

今の私の興味はそんな事より、超不思議カレーにあるです。

「カレーの味は一切なくて、ぬるってして、ねちよつとした食感とバナナをラムネに漬けてコーラで焼いた後、リンゴジャムで煮込んだ様な味なんてしないと思います。あの幻の不思議メニューは一度食べてみたいです」

さて、部活に行くです。のどか達が待ってるでしょうし。

あれから一週間後……その筋の奴に連絡を取ると、すぐにでも超不思議カレーを用意できるとの事だったので、綾瀬にメールを出し今日の放課後に世界樹広場で待ち合わせる事になった。その店の場所はちょっと分かりづらいところにあるため、案内する事にしたのだ。

「俺はどうなっても知らんから……」

確か綾瀬のクラスの担任は瀬流彦先生だったか？ 良いよなあ優しいそうな先生で。きつと腹壊して休んでも特にお咎めは無いんだろなあ……。こっちは生活指導の新田だぞ？ あん時は自己の体調管理がどうか言われて反省文10枚＋正座で説教1時間食らったもんだ。

「そうだ。あいつが来るまでに黒酢コーラでも飲んでみるか」

なんだかんだで結局飲んでないからな。待つ事になりそうだったら飲んでみるのも良いかもしれない。俺の好奇心を満たすと言う意味で。

「これで売り切れとかだったらちよつとショック」

そうして世界樹広場に着き、以前の自販機に行くと

「お、あるある」

特に売り切れでもなかったなので、早速購入。

「さーて、お味は　　微妙だな……」

もう、微妙としか言いようがないくらい微妙な味だ。特段不味いわけでも美味いわけでもない。コーラの甘味と黒酢のまるやかな酸味がマッチしてるようでしていない。それだけでも微妙なのにさらに炭酸が微妙さを際立たせている、何とも奇怪な飲み物だ。

「いや、まあ、面白いと言っちゃ面白い味ではあるなあ」

これからMAHORA印のドリンクを探してみるのも面白いかもしれないな。綾瀬に聞いてみるかな、結構飲んでるみたいだし。

「おや、もう来てたですか」

考え込んでいると、後ろから声がかかる。

「ああ。意外とHRが早く終わったからな」

本当に意外だ。あの新田が……長引かせることは日常茶飯事だがまさか早く終わるだなんて……な。

「そうですね。　　お、黒酢コーラを飲んでるですか」

「まあな。味は微妙だったけど面白いとは思ってたぞ」

「フッフ、あれの良さが分かるとはやりませぬ」

ニツ、と笑う綾瀬。なんか良く分からないけど、嬉しそうだ。

「ま、とりあえず今日の目的を達成しに行こうぜ」

そうそう。今日は別にここでダベりに来たわけじゃないんだよな。

「はいです。それで、超不思議カレーはどちらに？」

「話をつけてあるからついてこいよ。店まで案内するから」

「楽しみです」

それから俺は綾瀬を促して商店街の方に歩いていく。

「そついや綾瀬って部活入ってるんだよな？」

「ええ。図書館探検部に。あと児童文学研究会に、哲学研究会に入ってるですね」

「哲学ってのは良く分らんが、とにかく本が好きなんだな綾瀬は」
「そもそも哲学ってなんだっけ？」

「むう、哲学については今度じっくり説いて差し上げます。本が好きなのは哲学書を読んでいるうちに段々……と言った感じでしょ
うか」

「へえ〜。俺はあんま本とか読まないしなあ……。漫画とかなら良
く読むんだけど」

主にマガジソだな。最近よく読んでいる週刊誌は。……単行本は集
め出すとキリがないので買わない事になっている。

「それはいけませんね。今度、読みやすい本を選んで差し上げるので一度読むべきです」

「まあ、気が向いたらな」

面白そうな本があれば読むけどさ？ 興味をひかれない物に時間割きたくないんだよな俺って。

「それでは本を厳選し終えたらメールをするので覚えておいてくださいです」

「あれ？ 俺気が向いたらって言った気がするんだが」

「そう言う人は大抵その通りにしないものです」

……鋭い。

「はあ……分かったよ。でも俺が面白いって思わなかった突き返すからな？」

「ほほう？ それは私に対する挑戦と受け取りました。良いでしょう、後でごめんなさいと言いたくなるほど面白いものを選んでくれます」

いつの間にか勝負になっていた。ま、こういうのも面白くてアリ、かな？

「精々頑張れ。っと、ほら。目的の場所に着いたぞ」

目の前にあるのは『カレーハウス印度屋』と書かれた看板。俺達の

目的地であり、実は麻帆良で一番人気のカレー屋だったりする。(麻帆良新聞調べ)

「あれ？ ここはこの麻帆良でも有数のカレーを出すと言う店ではないですか」

「おう。実はアレ、この裏メニューだよ。俺もここでバイトしてる友達から聞いたんだ」

それで腹壊して一週間トイレに閉じこもるような状態になってしまったのだがな。

「ほうほう」

「いらっしやいませ、お二人様ですか？」

入るなりウェイトレスがやってきて俺達に話しかけてくる。店の中は意外と人がまばらだった。

「例のアレを頼んだ者だが……」

「！ かしこまりました。それではこちらへどうぞ」

俺の時と同じく、奥の部屋に通された。そこは個室になっていて、相変わらず隔離されているような気分だ。

「？ 何故こんな個室に？」

「そりゃ、裏メニューだからな。知る人ぞ知る……ってのにしたいんだろ？」

「なるほど」

それから10分ほど待って

「はい、お待たせしましたー。『超超不思議カレー改』でえ〜す
」

「……」

なんか、名前がグレードアップしていた。しかも、色はピンクでボ
コボコと噴いている。その姿に俺達は絶句した。

「ちよつと待て！ 俺は普通の超不思議カレーと言ったはずだ！」

「あ、実はですね〜。超不思議カレーって言うのは単なる全体的な
名称で、どれを作るかは店長しだいなんです〜 あ、お代いらな
いですよー？ 店長の気まぐれメニューですのでー」

「綾瀬……」

ポン、と綾瀬の方に手を置く。

「え？」

「フアイト」

そして満面の笑みでエールを送った。

「ちよつ！！！？？ 見捨てるですか！？」

「いや、見捨てるもなにも……食べたって言ったのは綾瀬だし？」

「そ、それはそうなのですが、こう実物を目の当たりにすると……」

さすが、と言えるほど綾瀬の事を理解したわけじゃないけど、かなり躊躇っているのは確かなようだ。

「案外食べてみると逝けるかもよ？」

「今、字がおかしくなかったですか！？ ……まあ、分かりました。確かに食してみたいと言ったのは私です。何より興味を引かれるのは間違いないですからね……」

そう言って、綾瀬はスプーンを手に取り一口分すくった。……ピンク色のカレー……でも青色よりマシじゃね？

「はむっ！ ……（ガクガクガク）」

「？」

おや？ 急に震えだしたぞ？

「 × 〜〜！！？? 」

くしばらくお待ちください〜

……

……

……

…

「こ、これは最早食べ物とは呼べないです……」

とてもやつれた顔で戻ってきた（どこからかは敢えて言っまい）。

「で、残りはどうする？」

「……え？」

「全部食べなきゃ勿体ないだろ？」

「ホ、ホントですよ。お客様が食べて下さらないと私たちが強制的に食べさせ」（ガタガタガタガタ……）

先ほどの綾瀬よりも激しくウェイトレスさんが震えだした。……何と言っか、ご愁傷様。

「し、しかしいくらなんでもコレは……」

「まあ、気持ちは分かるが……」

以前食った身からしたら……な。気持ちは痛いほどに分かる。

「やはり、食べないと駄目ですか……」

綾瀬は、泣きながらカレー（？）と激闘を繰り広げ…… 1時間後。

「た、食べ終えたです……」

そこには満身創痍の綾瀬。そして物凄くホツとした顔のウエイトレ
さんの姿があった。

「お疲れ」

「ありがとうございます！　ありがとうございます！」

「い、いえ感謝されるほどでは……うぶっ」

どうも、逆流しかけているようだ。早めに退散するとしてよう。

「それじゃ、帰るか」

「え、ええ……おぶっ」

多分、明日から綾瀬はしばらく学校を休むだろうな……。

店を後にして、女子校エリアギリギリまで送っていく。一応俺にも
責任の一端はあると思っただし、なにより途中で吐いたりしたら可哀
相だ。

「つと、ここからは女子校エリアだな。それじゃ、綾瀬……って大
丈夫か？」

「問題、ないです……うぶっ。そ、それより……わざわざ送って下

さってありがとうございます。えぶっ」

「……さすがにそんな状態の奴を放っていくのもな……」

半分は自業自得とは言え、結構良心が咎める。

「では……またいずれ」

「あ、ああ。気を付けて」

うーむ……恐るべし、超不思議カレー！ 二度と食わん！

1時間目 恐怖！ 超不思議カレー（後書き）

パ「パルと！」

の「の、のどかの〜」

パ・の「「1時間目座談会〜」！」

の「ハ、ハルナ〜……これもう恥ずかしいよお……」

パ「え、そう？ 私結構気に入ってたりするんだけどな。ま、それはさておき」

の「うう……」

パ「そういや夕映、今日寮に帰って来るなりトイレに閉じこもっちゃったけどなんかあったのかしら？」

の「え、えとえと、今回は超不思議カレーを食べに行くって言うたような……」

パ「えっ、あのゲテモノ好きのマスターが作る裏メニューを？」

の「う、うんー……」

パ「あー……のどか、夕映は当分学校に来れないって夕映のクラスの担任に言っというて」

の「え、え？」

パ「あそこの裏メニューね。今まで食べた人全員が腹痛で一週間くらい学校休んでるのよね〜」

の「え、えええ〜っ!?!?」

パ「まあ、夕映の事だからあの変なジュースの延長線上で食べたんだろうけど……南無」

の「あうあう……」

パ「それより私の興味は夕映がアドレスを交換したって言う男子にあるのよねー! のどかもそう思わない? 出会った経緯も含めてさ!」

の「そ、そうだけど……今はやっぱり夕映の事が心配だよ……」

パ「あ、そこら辺は気にしなくて良いって。特に後遺症とかないみたいだし」

の「そ、そう言う問題かなあ……」

パ「そう言う問題よ。 さて、誤字脱字・批判・アドバイスとか、感想待ってるね〜」

の「あ、え、えと……よろしくお願いしまひゅっ!」

2時間目 発足！ MAHORA不思議ドリンク研究会（前書き）

約十日ぶりの投稿、かな？

2時間目 発足！ MAHORA不思議ドリンク研究会

唐突だが……俺は今、結構ピンチだ。

「……」

「……」

目の前には山のように積まれた本。そして勝ち誇った顔の綾瀬。

「なあ……コレ、全部読めってか？」

あの惨劇から2週間ほど経過し、つい昨日綾瀬から『この間言っていた本の用意が出来たので明日、放課後に総合図書館に来てください』と、メールが来た。それで来てみればコレだ……。ゆうに12、3冊はあるぞ……。

「いえ、さすがに普段から読んでない人にはこの量はキツイでしょうから、とりあえず1冊読んでみてはいかがですか？」

「……そうさせてもらおう。えーと……」

ざ、っとタイトルに目を通す『羅賞門』『罰と罪』『明夜行路』……
……はて？ おかしいな、到底読む気すら起きない。

「どれか気になった物はあるですか？」

「お前の本の選択が非常に気になるわ！」

「？ 別に哲学書やらを選んだ記憶はないですが？」

「それ以前に、とりあえず有名な作家を集めとけばどれか読むだろうとも言いたげな本のチョイスはどうなんだ？」

「一応作家はある程度分かるけど……だからと言って読みたいかと聞かれたら答えはNOだ。」

「ふーむ……それならもう少し最近の小説とかにしますか？」

「そうだなあ……あ！ 出来たら推理小説とかで頼めるか？ コン君とか見てるから結構好きなんだよな、そう言うの」

「子供ですか二見さんは……。まあ、分かりました。持ってくるので少し待ってください」

持ってくるって……場所分かってるのか？ それだけ入り浸ってるんだろ。俺みたいの外でアホみたいに遊んでる奴と違って……綾瀬に感化されかな？ 俺も少しは本を読んだ方が良いんじゃないかと思ってきた……。

「とりあえず適当に読んでみようか。せつかく選んでくれたわけだし……」

とりあえず知ってるタイトル『長靴をはいた犬』があったので手に取って読んでみる事にした。

side - 夕映

「推理小説だと……赤川三郎シリーズがいいですか」

このシリーズなら好きな人も多いので問題ないと思うのですが……。問題はそちらよりも

「割と厳選したつもりだったのですが……二見さんの好みには合わなかったですか」

相手の好みも把握せずに自分の主観で本を押し付けてしまうとは……
… 猛省の必要があるです。

「まあ、今日は2、3冊あれば十分でしょう」

本を抱えて二見さんの所へ行くと

「……………」

私がおススメした本の一つを読み耽っていたです。

「あー?」

「……………」

…………… どうかやらの人はのどかと同じく、読みだすと集中して周りが見えなくなるタイプのようですね。とりあえず…………… 今のうちのお手洗いとジュースでも買うですか。

side out

「…………… ふう」

読んでいた本を閉じた。

「いや、なかなか面白かったな」

こうして読んでみると本も悪くないなあ。漫画ばかりだったから活字が新鮮なこと。

「おや、やっと読み終わっただですか」

「あれ？ いつの間に……」

「声はかけたですが、集中していたようで全くこちらに気付かなかっただです」

あー……持ってきてって頼んでたのにそれは悪い事をしたかな。

「悪い。俺ってどうも、集中すると周りが見えなくなるみたいで」

我ながらスゴイ集中力だと思う。

「そのようですね。しかし、先ほどは興味が無いように言っていた気がするのですが？」

「いや、その……俺も知的なクールガイを目指そうとな」

「……」

『コイツ馬鹿だ』って目で見られてるよ。

「冗談だ。ま、少しは本を読んでおくのも悪くないかなーって思っ

ただだよ」

「それはなにによりです。あの、実は本以外にもう一つお話があるのですがよろしいですか？」

「超不思議カレーは御免被るぞ？」

あそこに行くくらいなら俺はここで本を読み続けるぞ……。

「……あれは私も遠慮しますです。ではなく、私が言いたいのは見さんもあのMAHORAドリンクに興味があるのですよね？」

「んー、まあ確かに気になると言えば気になるかなあ？ バリエーションが色々あるみたいだし」

「そうです。正しく私が言いたい事はそれなのです」

「？」

俺には綾瀬が何を言いたいのかがさっぱり理解できん。

「私は、このMAHORAドリンクをコンプリートしたいのです」

ちなみに今綾瀬が飲んでるのは抹茶オレンジなるもの。今度俺も何か買ってみよう。

「へえ、なかなか面白そうだな」

「二見さんならそう言ってくれると思っていました。そこで……私がかねてより設立しようと思っていた『MAHORA不思議ドリンク』

ク研究会』に参加してくれませんか？」

「『MAHORA不思議ドリンク研究会』？」

つまりは、その不思議ドリンクを全て調べ上げてリストでも作ろう
つてことか？

「そうです。ですが困ったことに私一人では成し遂げる事は出来な
いです」

「まあ、この学園広いしなあ」

全ての自販機を押さええない限り、到底無理じゃなかるうか？

「ええ。ですから人手が欲しかったのです。特に男性が」

「そりやまたどうして？」

「男子校エリアにしかないドリンクが存在するかもだからです。さ
すがにそこに行く事は出来ないのでからね……」

なるほど、そりや男子しか無理だわなあ。

「ふー……ん」

「それで、入ってきますか？」

「良いよ」

俺は面白ければ別にドリンクだろうが何だろうが大歓迎だ。

「ありがとうございます！ それでは部活申請の書類等を作って提出するので、明日学園長先生のところへ一緒に来てほしいです」

「了解。それじゃあ明日は土曜で半ドンだから授業終わり次第、教員棟に行けばいいか？」

「そうですね。それで大丈夫です」

「OK。それじゃ、片付けて今日は解散にするか」

と、席を立つ。

「あ、私が直しておくから良いですよ。知らない人がやるとかえって余計に時間がかかりますし」

「そうか？ 悪いな」

「いえ。先ほども言いましたが、この方が効率がいいです」

「分かった。じゃ、また明日」

「はいです」

ちよつと後ろ髪を引かれる思いで図書館を後にした。

「……MAHORA不思議ドリンク研究会、か」

要するにこの学園に存在するMAHORA印のドリンクを全て飲んでそのリストを作るのが目的なのだろう。そんな事をして何の意味

があるか分からないが……ま、面白そうだから俺は気にしない。

「あれ？ そう言えば部活になるのって4〜5人いるんじゃないかなかった？」

今のところ俺と綾瀬しかいないように思っただが……。

「ま、明日になれば分かるか」

そして翌日

「おっと、待たせたか？」

授業が終わり次第、教員棟に向かうとそこには既に綾瀬の姿があった。

「いえ、そこまでは待ってないのでお気になさらず」

「そっか。で、他のメンツは？」

「え？」

「いや、だから研究会の他のメンバーはって」

まさか……

「いないですよ？」

やっぱりか……！

「……それじゃあ部活として認めてくれないんじゃないのか？」

「ですからこれから学園長先生を説得に行くですよ。この時間は空いていると友人に聞いたです」

学園長のスケジュールを知ってる人って誰だろう？ 教師？

「さ、行くですよ」

そう言うなりさっさと歩きだしてしまった。

「あ、ちよっ！」

慌てて後をついていく。なにせ、俺は教員棟なんて来たことがないから学園長がいる部屋なんて分からないからだ。

それから階段を登ったり廊下を歩いたりする事約5分

「ついたですね」

『学園長室』と書かれた立派なプレートがぶら下がっている部屋の前に着いた。

「だな」

「それじゃあ、入るですよ？」

綾瀬がノックをし、『どうぞ』と聞こえたので中に入った。

「おお、このかから話は聞いておるぞよ」

「ありがとうございますです」

「……」

学園長相変わらず頭長えっ！ ふと、この人って人間なんだろうか
って思う時がある。こうやって至近距離で見ると初めてだ。ま
あ、普通は部活を作ったりする時くらいしか学園長に用なんかない
しな。

「おや、そっちの君は……」

「あ、失礼しました。男子中等部1-Cの二見隼人です」

「そうかそうか。夕映君の部活のメンバーじゃの？」

「はい」

「どうやら、気さくな人（？）っぽいな。」

「学園長先生、私が提唱するMAHORA不思議ドリンク研究会な
のですが……二人でも部活として認めて頂くとするのは無理ですか
……？」

「ふお？ 別に構わんぞよ？」

「あっさりOKかよ……。俺の心配は一体……。」

「あ、ありがとうございます！」

「そうじゃ、良ければわしにもそのドリンクを少し回してもらえんかの？　ちよつと気になってたんじゃよ」

「それくらいお安い御用です」

「はは……」

「掴めない！　この学園長、どういう人間（？）なのか全く掴めないんですけど！」

「とりあえず承認っ」と

どん、と承認印を部活の設立書類に判を押してくれた学園長。

「やりましたね」

「ああ。これで気兼ねなく飲めるな」

「楽しみです」

「ふおふお、ではわしの分も含めて頼んだぞい」

「はい」

「それでは失礼しますです」

学園長に頭を下げて学園長室から出た。

「いや、最初はどうなるかと思ったけど杞憂だったみたいだな」

「ええ。学園長先生も興味があったからOKしてくれたのでしょ」

「結構お茶目なんだなあの人……」

「まあ、とにかく……これから不思議好きの同志として、よろしく
お願いしますです」

「おう。こっちこそよろしくな」

そう言って俺達はガツチリと友情の握手を交わした。

………この時、一瞬女の子って柔らかいんだなあー、とか思った
のは内緒ってことで。

2時間目 発足！ MAHORA不思議ドリンク研究会（後書き）

パ「パルとー！」

の「の、のどかの〜」

パ・の「「2時間目座談会〜」！」

パ「どう？ さすがに3回目にもなると慣れたっしょ？」

の「（ふるふる）！」

パ「……まあ良いわ。そういえば今日は夕映が珍しくメールをひたすら打ってたわね」

の「あ、うん。新しい部活を作ったからそれに関してのって言うってたよ〜」

パ「へえ〜。で、どんな部活作ったの？」

の「えと、確かMAHORA不思議ドリンク研究会って言う……」

パ「……ついに部活を作るにまでなったのね……。と言うか私アレ飲んでるの夕映しか見た事ないんだけど」

の「それが、3週間くらい前に同志に出会ったって……」

パ「むっ……（キュピーン）！ なるほど、つまりその同志が件のアドレスを交換した男ね」

の「え？」

パ「確か夕映が男とアドレスを交換したのがちょうど3週間前。定期的に見てもびったりじゃない？」

の「あ、あ〜……」

パ「男と二人つきりで部活……あのデコ娘、意外とやるわね」

の「あうあう……」

パ「それも十分特ダネだけど、夕映以外にあのドリンク飲んでる人がいるってのにも驚いたわね」

の「そ、そうだね〜……」

パ「会ってみたいわね。今度夕映に言っただけで会わせてもらおうか」

の「え、え〜っ!?!?」

パ「さて、それじゃ恒例の……誤字脱字・批判・アドバイスなど、感想待ってるよ〜!」

の「あ、お、お待ちしてますっ」

3 時間目 秋って食べ物が美味しいよね(前書き)

課題の目途がつき、隙を見つけて更新つ。でも、中盤からはやっぱり感が出てるから微妙かもしれないです……。

3 時間目 秋って食べ物美味しいよね

なんだかんだで10月も中盤。そして第一回MAHORA不思議ドリンク研究会の活動日だ！ん？今まで何してたかって？そりゃ綾瀬の方が部活や何やらで忙しかったらしいからな。俺は帰宅部だからする事もなく暇してたけど……。

「　　」

鼻歌を歌いながらそそくさと荷物をまとめる。

「ん？ お前どうかしたのか？」

「ああ、これから部活にな」

「へえ、部活入ったのか」

「おう。それじゃな」

級友に手を振って活動場所の世界樹広場のカフェに向かう。

「おい」

綾瀬を見かけたのでさっそく声をかけた。

「来たですね。それでは第一回の活動を始めます」

「つつす会長！」

「会長……悪くない響きですね」

まあ、二人しかいないんだけどな……。

「コホン！ それでは第一回と言う事で今後の活動内容を説明
するです」

「はい」

「まずですね。主な目的はMAHORAドリンクのコンプリートで
す」

「そうだな」

そのためのMAHORA不思議ドリンク研究会だし。

「そのため、一週間の間に各々ドリンクを飲み、その味と名前、買
った場所をこのノートにメモし、金曜日の放課後にそれぞれの成果
を報告し合い、リストを作っていくです」

そう言いながら綾瀬は『MAHORA不思議ドリンクメニュー表』
と書かれたノートを渡してきた。

「はい、質問」

「なんででしょう？」

「行く場所が被ったらどうするんだ？」

同じ場所に来てしまったら無駄なような気がするんだが。

「それは行く前……日曜なら朝、学校がある日なら放課後すぐにメルで何処へ行くかを連絡し合えば問題ないです。もちろん、気が乗らなくて活動したくない場合もあるでしょうが、その時も連絡はください」

「なるほど。了解した」

「ちなみに、私の見立てではこの麻帆良を回り切るには膨大な時間がかかると言っても良いでしょう」

「いや、見立てもクソも分かり切ってる事だけだな」

この学園めちやくちや広いからなあ……。

「とにかく、この広大な敷地を誇る麻帆良学園です。ドリンク制覇は長期的に見るしかないでしょうね」

「そうだろうな」

「現状では我々二人しかいませんですが、頑張っていきましょう！」

「おつよー！」

学校の金で面白い事出来るなんて最高だな。

「さて、せっかくカフェにいますし何か食べますか」

「さすがにコーヒーだけですっと居座るのもなあ」

問題は無いと思うけど、なんか申し訳なくなる。

「そう言う事です。では私はこのマツタケパフェを」

「そんじゃ俺はナメコサンドをもらうか」

又メヌメ感が意外と美味かったナメコサンドを食べ、その日は解散とな

「おーい、夕映ー！」

らないみたいだな。

「おや、ハルナにこのかささんどうしたですか？」

「いやいや、あんたこそどうしたのよ。男とさもカップルの様にさー！」

「「？」」

俺達は首を傾げた。はて、俺達は部活をしていただけで別にカップルだとかは微塵もないんだが。

「そつやえ夕映ー。恋人がおるならおるって言うてくれたらええやんー」

関西弁……かな？　なんか違う気もするけど、この辺じゃ結構珍しいな。確かこのかって呼ばれてた人か。

「先ほど何を言っているのか皆目見当がつかないのですが」

「俺も」

「はい？」

今度はあちらが首を傾げた。

「私たちは部活をしていただけです」

「こんなカフェテラスで食事しながら？」

「それはコーヒーだけじゃ可哀相かと思って」

「あや」

「そんじゃ私たちの勘違いってこと!？」

なんでそこで酷く残念そうな顔で俺を見る？

「まったく……アホな勘違いです」

「アホは言い過ぎだと思うが……まあ、盛大な勘違いだな」

「むううう……ま、いつか。私中等部1・D早乙女ハルナ、パルって呼んでちょうだい」

「え？ あ、ああ。俺は男子中等部1・C二見隼人」

なんか良く分からんがいきなり名乗ってきたので、こちらも名乗る事にした。

「うちは中等部1 - B 近衛木乃香やよ。よろしくな」

「ど、どうもよろしく」

スゴイほんわかした子だな……。癒し系ってやつかな。

「……結局何がしたかったですかハルナ達は」

「ん？ 夕映の動向チェック」

はた迷惑なことしてるなあ……。

「ストーリーですか貴女は!？」

「いやいや、友人としての健全な心配からきてるのよ？ 決して下世話な好奇心とかそんなのじゃないわ!」

「実はなー、ハルナがなんや面白そうやから夕映を尾行しよう言うてな」

そしてあっさりバラす近衛さん。……っておや？ 近衛ってどっかで聞いたことあるような……。ま、気のせいかな。少なくとも俺の知り合いに近衛って苗字のやついないし。

「コホン。ま、一応ちゃんとした用事もあるのよ」

「なんです?」

「図書館探検部の次の、と言つてもこの後なんやけど。活動場所に

変更があったから伝えに来たんよ。うちらもさつき知ったとこでな
」

「そう言う事ですか……。それならそうと言って……はくれないで
すよねハルナの場合」

どうやらパルはこの中ではそう言うキャラらしい。

「トーゼン！ 普通に教えるだけじゃ面白くないでしょ？」

……仲良くなれそうだな。でも、勘違いは止めて欲しい。いちいち説明するのがめんどくさいし。

「はあ……。それで、どこになったのですか？」

「えとな、図書館島に現地集合やて」

「今日は特に説明する事はないってさ」

「そうですか。では二見さん、これから図書館探検部の活動があるので今日は失礼するです」

「あいよ」

さて、それなら男子校エリアのドリンクでも見に行くか。

「ちょおーつと待ったあ　　！！」

パルの大声に、歩きかけた足を止めた。

「え、なに？」

「せっかくだし、君も来ない？」

「は？」

なぜに？

「だって向こうにはのどかもいるし紹介しときたいじゃない？ 友達としては」

「ハルナ……のどかは男性恐怖症なのですよ？ 二見さんは悪い人ではないですが、いきなりは無理だと思っです」

「せやえハルナー」

「えーと……」

当然の如く、置いてけぼりだ……。まずそのどかとか言うのが誰か分かんないし。

「ま、連れてけば分かるって」

「はあ……。あの、二見さん。ご迷惑だとは思っていますが、良ければ図書館島まで来てくれませんか？ 主にハルナがうるさいので」

「あはは、まあでも二見君にも用事あるかも知れんし、無理はせんでええよ？」

「ん〜……ま、暇だしいつか」

本には少し興味が出てるし。図書館島に行ってみたかったってのもあるし。

「よ〜っし、そうと決まればさっさと行くわよ〜！」

「やれやれです」

「はは、いつもこんな感じ？」

パルの様子を見て二人に聞いてみる。

「せやね。割とこんなんやよ」

「基本的に騒ぐの好きですからねハルナは」

「おいこらー！早く来るったら来る！！」

……

……

……

…

「でかつ、広っ！？」

いや、まさかここまで広いとは思わなかったあ…………。

「フッフ、その反応……ここに来るのは初めてね？」

「ああ。どうせ行くとしても図書室とかその辺だし」

「普通はそうでしょうが、やはり調べ物をしたいなら図書館島が一番ですよ」

何故か自慢げな表情をする綾瀬。

「ほおー。そんじゃま、なんか適当に」

「あ！ ちょっと待つです！」

「え？ なん」

本を取りかけたところで、俺の目の前に矢が突き刺さった。

「……えーと、説明求む」

「ただ単に貴重書狙いの泥棒を撃退するための罠ですよ」

「待てやコラ。こんなもん仕掛けられてたら読めないだろうが！！」

かなりビビったのは内緒の話だ。

「でもね、本当に貴重な本とかあるし仕方ないっちゃ仕方ないんだよねえ」

パルが補足説明を入れるが……怖い事に変わりはない。

「それに、ちゃんと畏の位置覚えてれば大丈夫だよ？」

「いや、覚える前に死ぬからね？ マジで洒落になんねーから」

「安心してください。お墓にはちゃんとおススメの本を添えてあげます」

「そっか、そりゃ安心だ。 って死ぬ事前提！？ しかも死んでまで本読ませる気かお前は！」

ぐにー、っと綾瀬の頬を引っ張る。

「ふあっ！？ ふぁにをふるでふか！ はなふでふ！！」

「おお、柔らかい柔らかい」

「やめるでふ っ！！」

そうやって綾瀬の頬を堪能し、解放してやる。

「うっ……酷い目にあっただです」

「自業自得だな」

「……」見君も結構やるわね。女子の頬を容赦なく……」

「ウチじゃなくて良かったえ……」

先ほどの様子を見ていたパルと近衛さんが引きつった笑みを浮かべていた。

「まったく……まあ、とにかく本を取る時は気をつけないといけない
って事は分かった」

「……それでは集合場所に行くですか」

赤くなつた頬をさすりながら綾瀬が先導する。

……

……

…

「でさ、そんな時夕映が」

「ちよっ！ ハルナ、変な事を吹き込むなです！」

「くくっ、マジかよそれ」

と、談笑しながら歩いていき

「着いたです」

少し開けた場所に出てきた。図書館探検部の部員であろう人達がち
らほら見える。

「それじゃのどか呼んで来るから少し待っててねー」

「本を読みたいときは部員に言うですよ？」

「ほんじゃね〜」

「ほーい」

三人を見送り

「……暇だなあ」

適当に本でも読むか。えーっと近くにいる部員さんは と

「あ、いたいた。すんませーん」

割と近くにいたショートヘアの女子に話しかけた。

「えっ？ は、ははははい。な、ななななんでしょうかー……？」

なんか、めっちゃ怯えられた。……俺ってそんな人相悪いかな？

「あー、その、何か本を読もうと思ったんだけど、おススメとかってある？」

見たところ、同い年っぽかったのでタメ口で話す。

「あ、ああああのっ、す、すすすす好きなジャンルとかはー……」

「え？ うーん……推理小説とかは結構好きかな」

「そ、そそそそれでしたら、あちらの棚にー……」

どんどん後ずさっていくが、とりあえず教えてはくれたみたいだ。

「ん。サンキュー」

「い、いいいいいい……」

……俺、知らない内にこの子に何かしたんだろうか……？

「……ま、いつか」

細かいことを気にしても仕方ない。とりあえず、綾瀬達かのどかとか言う人を連れてくるまで待つとしよう。

3時間目 秋って食べ物が美味しいよね（後書き）

パ「パルと！」

の「の、のどかの〜」

パ・の「「3時間目座談会〜！」」

パ「さて、鈍亀作者のおかげで前回から一ヶ月ほど経ったわけだけ
ど……」

の「え、えつと……一応あの人にも事情が……」

パ「ま、あの人のことはもう良いとして。ついに例の彼と接触を果
たしたわけだけど……」

の「そうなの？」

パ「そ。次回にのどかにも紹介してあげるから楽しみにしてなさい
よ〜」

の「あつっ……」

パ「にしても、つまんないわね！。夕映ってばもう少し動揺するか
と思っただのに無反応で」

の「え、えと良く分からないけどやっぱり友達だからじゃ……？」

パ「それが問題だったの！ 男女間の友情なんて愛情と紙一重にも

等しいってのー!」

の「(もう帰ろうかな……)」

パ「ねえ、のどかもそう思うd　ってあれ？　のどかー？」

の「えと、その、よろしかったら誤字脱字・批判・アドバイスなど……ご感想をお願いしますー……」

パ「ぬおっ!？　いつの間にかのどかが宣伝側につ!？」

の「そ、そのたまには良いかなって……」

パ「ん〜……でもさあ、毎回それじゃ見てる人飽きない？」

の「えう……わ、私に言われても〜……」

4時間目 実録、図書館島の恐怖！（前書き）

今回は前回よりもやや短めになってしまいました。

4時間目 実録、図書館島の恐怖！

先ほどの部員の子が言っていた場所で本を読んでいると

「あ、いたいた！ おーい！」

「ん？」

パルの声が聞こえたので、本を読むのを止める。

「ったくー、迷子になったかと思ったわよー」

「少々探したですよ。携帯にも出ないですし……」

「え？ あれ……無いな。どうも、部屋に忘れたっばいわ」

いつも入れているズボンや学ランの内ポケットを探しても無い所を見るとおそらく部屋だ。

「そーなんや？」

「ああ。んで、あそこで待ってても暇だから部員の人にここに案内してもらったってワケ。ところで、例の子は見つけたのか？」

ここまで来て見つからなかったとか言われても困るぞ……。

「ええ、まあ……。のどか、この人が先ほど言った二見隼人さんです」

「あつあつあつ」

綾瀬押されて出てきたのは……。

「あ、さっきの」

「ん？ のどかと知り合い？」

「知り合いつて言うか、ここに案内してくれた部員さんだなあ、と」

「へえ。で、どうだった？ のどかの反応は？」

ちなみに、のどかと呼ばれている子はパルの後ろに隠れてしまっている。

「……俺嫌われてる？」

「……やはりですか」

「まあ、例外は無かったわけか……」

「せやねえ」

綾瀬達は俺の回答に納得している様子だが……。

「えっと……どういふ事？」

「つまりですね、早い話のどかは男嫌いなんですよ」

「男嫌い？」

「そ。だから別に二見君が特別嫌われてるわけじゃないから安心していいって」

そこ、笑いながら言う事じゃねえだろ。

「のどかー、いい加減隠れてんと自己紹介くらいしよつやー」

今度は近衛さんが押し出す。

「あ、ひう、えう……」

「えーと……男子中等部1-Cの二見隼人……です」

なんか、こうして自己紹介するのでさえ申し訳なくなってくるほど縮こまっちゃてるんだけど……。

「ほら、のどかも挨拶くらいする！」

「え、えと……み、みみみ宮崎のどかで、でででしゅっ！　くくくく……」

あ、噛んだ。

「あ、あはは。やっぱりすぐには無理やね」

「まあ、分かり切ってた事ではありますが」

「結構イイ線行くと思ったんだけどなあ。失敗失敗」

「えーと、とりあえずそろそろ帰っても良い？」

宮崎さん紹介しただけみたいだったし。そして宮崎さん怯えまくってるし……。

「そうですね。それではまた」

「いやいやいや！ 折角だし図書館探検部の活動に参加しなさいって！」

「……すみません。お願いしますです」

パルの説得は最初から諦めたようだ。

「はは……OK」

「なんや、おもしろい事になってきたなあ」

「あつう……」

そして

『では、今日の活動を始めます！』

図書館探検部の活動が始まった。

「ところで、俺は何をすれば？」

「そうですね……さすがに二見さんは見学者という立場ですから、それと違ってしてもらおう事は無いですよ？ ただ」

「

「お、なんか面白そうな本発見　　おわあああつ!?!?」

取ろうとした瞬間、槍が降ってきた。

「至る所に罠が仕掛けてあるから気を付けるです」

「うおう……忘れてたぜ……」

いや、一応後ろは警戒してたよ？　でもまさか、上からなんて思わないじゃんかよ!

「ま、今日は罠の位置を覚えるために見学して事で良いんじゃない?」

「おお、名案やねハルナ」

「……それってこれからもここに来る事前提の話になってない?」

「え?　そりや部に入れとは言わないけど来ることはあるかもしれないでしょ?」

「どつだろつなあ……」

こんな怖い場所出来れば近寄りたくないんだが……。

「あ、そこ気を付けてくださいです」

「へ?」

綾瀬がそう言った瞬間、宙に浮く感じを覚えた。

「わあああつ!?!?」

落ちる寸前に必死で本棚に掴まった。

「あ、そこは……」

「え? なあああつ!?!?」

今度は本の隙間からナイフみたいなものが飛び出して来た。

「死ぬ! これ死ぬうううううっ!!!!」

「えーと、この仕掛けは確かこうして……ここはこう……」

俺が叫んでいる間、綾瀬が何やら本棚の周りを弄っていて……急に仕掛けが停止した。

「た、助かった……?」

「ええ。仕掛けの止め方は教わってますので」

「それにしても……スゴイ見事に罠にハマったわね」

「だ、だだだ大丈夫ですかー……?」

かなりか細い声だが宮崎さんまで心配してくれる。……さっきの俺、客観的に見ても相当ヤバかったんだろうなあ……。

だが、俺の苦難はこれで終わらなかった。

「あ、そこは」

「？ ぎゃあああああつ！！！！？？？」

ちよつと本を見ようと思って近づいたら下から格子状に剣が突き出して来たり

「そこを踏んでしまつと」

「ごげぶつ！！！！？？？」

何かスイツチらしきものを踏んだと思った瞬間に、頭に金タライが落ちてきたり

「それには触らない方がええよー」

「え？ ぼぎゃあああああつ！！！！？？？」

ちよつと疲れたので壁に寄り掛かると電流が走って痺れたり

「そ、そそそそこには近づかない方が……………」

「ん？ あぢゃああああああつ！！！！！！！！？？？？？」

喉が渴いたので自販機に行こうとしたら、四方向から炎が噴射されたり……………本当に散々としか言いようがないほど酷い目に遭った。

「もういや……………もうおウチに帰りたい……………死ぬ、これ以上はマジで

死ぬ……」

「あそこまで行くと最早何かに呪われてるですね……」

「さすがにあんだけの事が起こるとはねえ……」

「ほんまに」

「……………」

でも……あれだけの事が起きてても生きてるって事はある意味幸運なんだろうか？ 全身ズタボロだけど……。

「とりあえず、これを飲んで落ち着くです」

「うげっ、夕映それって……」

「MAHORA不思議ドリンク研究会の活動の一環です」

「でも練乳ミートソース味で書いてあんなけど……」

「の、のののの飲めるのー……？」

ほづっ。面白そうだな。

「おう、サンキョ」

「うわー……………マジで飲んでるし」

「ど、どんな味するん？」

「ん？ 舌触りはぬらっとしてて、練乳の甘さがミートソースと全く絡まり合う事は無く、それぞれ個性を出しまくった味がするな。喉越しはぬるっとしてて非常に飲みにくい」

ふむ、学園長の分も買っておくか。

後日、喜んで飲んだ学園長は腹痛で倒れたそう。

「……それ飲み物って言うの？」

「何を言うのですかハルナ。まごう事なき飲み物じゃないですか」

「だよな。お前らも飲んでみるか？」

「」「遠慮しとく」「」

あの宮崎さんまでもがきっぱりと言いつつ切った。

「そうか？ 別に不味くは無いのになあ」

「です」

俺達は顔を見合わせてそう言う。

「あんたらの舌に合わせてたらこっちが保たないっつーの！」

「あ、あはは〜」

「あつあつ……」

「よし、さっそくノートに記入しておこう」

綾瀬に渡された『MAHORA 不思議ドリンクメニュー表』と書かれたノートに先ほどの練乳ミートソース味の感想と置いてあった場所を書いておく。

「ふふ、この調子でコンプリートしましょう!」

「おつよ!」

「……おいしい、このアタシがツッコミに回るなんて……」

「ま、まあそう言う日もあるんとちゃっつ」

「う、うううん……」

「……おや?」

綾瀬が練乳ミートソースのパックを見て首を傾げた。

「ん? どうかしたのか?」

「いえ、ただ『eagle様より』と書いてあります」

「なんだそりゃ?」

「さあ……大方作者の関係者でしょう」

「ふうん。ま、とりあえず先行こっぜっ!」

まあ作者関係なら俺達が口出せる事じゃないしな。

「あれ、もう大丈夫なの？」

「その、なんだ。もう諦めた」

きつと、今日はこういう日なんだ。

「おお、開き直った」

「……………」

「それなら早速出発するですか」

「おっ……」

俺は、この日ほど自分のバカさ加減を後悔した事は無いだろ。

4時間目 実録、図書館島の恐怖！（後書き）

パ「パルと！」

の「のどかの〜」

パ・の「「4時間目座談会〜！」」

パ「 と言いたいところなんだけど、今日はちょっと趣向が違うのよねえ」

の「そ、そうみたいだねー……………」

パ「てなわけで、作者にパース！」

ほい。どうも、作者です。

今回はこの場を借りて軽いアンケートを取ろうと思っています。

まず一つ目は主人公君の名前。 あった方が良いか、このままでも良いか。 自分でやっつきながらちよつと不安に思ってきました……。

二つ目はMAHORAシリーズのメニューです。 自分一人でも出来ますが、色んな方の考えと言つか発想を知りたいのです。

そこで、本当にどんなのでも良いので（さすがに食えない物はNGで。 歯車とか机とか）案を募集します！ ここはインパクト重視で進めたいので、インパクトの薄い物は却下してしまうかも知れませんが。

新たなMAHORAシリーズへ是非に挑戦してくださいwww

パ「 ってアレを増やすわけ!?!? 」

そーですが？

パ「 収集つくのかしらアレ…… 」

の「 あ、あはは…… 」

課外授業 自己紹介（前書き）

一ヶ月もの時を経て、ようやく決まった主人公君の名前を本文にて紹介いたします。

名前は出来る限り普通な感じでした。

課外授業 自己紹介

ようやく決まった名前：二見 ふたみ 隼人 はやと

後は簡単なプロフィールをご紹介

年齢：13

見た目：身長152cm、黒髪の短髪、やや猫背で細身

血液型：O型

誕生日：12月16日

家族：父・母

性格：自分が面白ければ割と何でもいい。不思議食物シリーズはもう嫌らしい。

なので大抵の出来事を受け入れる。

人見知りはない。

思考がマイナスに行く事は少なく、基本的に前向きで単純。

好きな事：自分にとって面白い事、やりがいのある事

嫌いな事：追試、暗い雰囲気

趣味：人があまりしないような事をする事（それが面白いと思っている）

特技：鼻からジュース飲む。炭酸は嫌。

課外授業 自己紹介（後書き）

「よし、ようやく俺の名前が決まったから自己紹介を って既に紹介されてる!？」

あ、ごめん。

「ま、まあそれは良いとして……俺は単純なんかじゃないぞ！」

……。 あっ、UFOだ！

「えっ、どいどk……」

さて、読んでくれている皆様方。あんな奴ですが、物語が続く限り応援してやってください。

それでは、次話でお会いしましょう。

「くっ……べ、別に今のはわざとひっかかってあげたんだからねっ！ 勘違いしないでよねっ！」

5 時間目 再来する悪夢（前書き）

今回はドリンクの出し方がかなり無理矢理です。ホント、すいません（汗）

5 時間目 再来する悪夢

フツ、あんな浅はかな事を言った俺を笑うが良いさ……。

「……だいじょぶ？」

「本当に呪われてるんと違う……？」

「あれから水を被ったり、氷漬けになったり、穴に落ちたり、滑って転んだり、顔から泥沼に突っ込んだり、飛んできた岩に吹き飛ばされたりしたですしね……。」

「あうあう……。」

「あはっ、あはははは！！」

もう、笑うしかなかった。笑うしかこの不幸とかのレベルじゃない苦行を耐え切る手段は無かった……。

「ちよっ！ 大丈夫ですか!？」

「こりゃ重症ね……。」

「いやいやハルナ、落ち着いてる場合やないえ！」

「う、うん……。」

「殺せっ、もう殺してくれえええええっ!!!!!!」

いつそ殺せよ！ その方がどんだけ楽かつ！

「早まるなですーっ！ー！」

「あちゃあ……このか！ トンカチ！」

「はいな！」

「どりゃあああああっ！ー！ー！」

「うげっ！？ ………………」

どがんっ、と後頭部にとてつもない衝撃が走り、俺の意識は一瞬で沈んだ。……ねえ、俺今日なんか悪い事した？ ねえ！？

side - タ映

「……ハルナ、やりすぎでは？」

完全に意識がないのですが……。

「う~~~~ん……ま、大丈夫でしょ。息はしてるみたいだし」

「……でも今物凄い音したえ？」

「くくくく」

「まるで頭蓋骨を陥没させたような音がしましたが………」

確かに息はしてますがこれではちょっと……。と言うか本日で一番

キツイ一撃のような気もするです。

「まーまー。とりあえずどっかその辺で休ませてあげよか」

「せやね。きつと疲れてただけ……やと思っし」

「ですね。疲れただけ……ですよね？」

「そ、そうだよね……」

「一応病院に連れて行った方が良いでしょうか？ 精神科の。」

「ま、とにかく運んじやいましよ。このか、夕映あんた達は肩持っ
て。私は足持つから。のどかは触るの無理だろうからまたへんなジ
ュースでも買ってきて」

「はいな」

「OKです」

「わ、わかった……」

変なジュースとは失礼ですね。あんなに美味しいと言っのに！

「よっし、いくよー。せーっのー！」

それから気絶した人間と言っのは想像よりも重いつ事を実感し、
二見さんを近くのベンチまで運びましたです。

「う、う……」

「うなされてるようですな」

「嫌な夢でも見とるんちゃう？」

「まあ……あれだけの事があつたら普通は嫌な夢の一つや二つ見るでしょ？」

side out

「う、う……あれ？」

目を覚ますと、目の前には世界樹広場があつた。

「俺確か図書館島に行って、ありえないほど酷い目にあつてたはず……」

そついや最後ってどうなつたんだっけ？

「おや？ 全然思い出せないぞ？」

なんでだろう……？ よほど嫌な体験でもしたのかな。

「お、二見じゃん。こんなところでどしたー？」

「え？ あ……鷺崎か。いや、別に」

いきなりクラスメイトの鷺崎が現れて話しかけてくる。なんだなんだ？

「ふーん？ それじゃ、約束してた『アレ』食わせてやるよ」

「『アレ』？」

何の事だ？ こいつに頼んだのは超不思議カレーだけだぞ？ それ以外に何か頼んだ記憶なんてないが……。

「なんだよ、お前が言ってきたんだろ？ 『激烈麻婆EX』が食いたいって」

「は！？ なんだよソレ！？ 初耳だぞコラ！！！」

俺は自分の体の為にも食い物はある程度まともなのを食うって決めてるんだ！！

「はぁ？ ま、いいや。ほら、行くぞ」

言うが早いか、俺の腕を掴み引つ張ってくる。

「止める！ 離せ！ 行きたくない！！」

て言うかなんだコイツ！？ 力強え！ 振り払うどころか止める事すら出来ないんだけど！？

「往生際が悪い奴だな。もう店長には話つけてんだからな。俺のためにも食え。俺の信用が落ちたら困るじゃねーか。俺が」

「結局全ててめえのためじゃねえか！！ つの！ はーなーせーっ！！！」

しかし激しい抵抗も空しく……。

「着いた……着いてしまった……」

「店長……。例のヤツ連れてきましたよー」

呑気に店長などを呼びやがる鷺崎。しかも腕はガッチリ掴まれたままなので逃げ出す事が出来ない。

「くそっ！」

「逃がさん」

「よしっ、良く連れて来てくれた鷺崎君！ これでようやくじっけ……ゴホン。麻婆豆腐も浮かばれるよ」

「実験！？ 今実験って言うたろ！？」

つか浮かばれるってコイツ、食い物を粗末にしてるって分かってやっつてんのか！？ 性質悪すぎだろ！！

「さ、被験者（笑）君。気にせず食べてくれたまえ」

そう言って目の前に出してきやがったのは、濃い紫色をしていて、豆腐と思わしき物は緑色だった。

「どつだ？ 面白そうだろ？」

「やかましいわ！ しかも店長、てめえ今被験者（笑）つつつたる！ やっぱり実験台なんじゃねーか！！」

「やれやれ。鷺崎君が「面白い物なら何でも試す奴がいる」って言うから試行錯誤の上に作ったのに……その反応はあんまりじゃないかい？」

……はい？ てことは、コレ『俺専用』なわけ！？

「鷺崎、お前……」

「お、なにになに〜？ そんなにプルプルしちゃって、ひよっとして俺の友情に感激？ やだなー、別に気にしなくても良いのにさー」

コイツコロス。

「死ね！ 鷺崎いいいいいつー！」

「はい、麻婆豆腐」

「んぐつ！？」

叫んだ時に大口を開けたのがいけなかったのか、店長に食わされた。

「どつどつ？ 僕たちの傑作は？」

「もぐもぐ……何か、麻婆の部分がべっちよりしててなぜか炭酸みたいにシュワシュワしてて辛いハズなのに甘い……。豆腐は何故かソースの味がするし、せんべいのように硬いし、んでめっちゃ納豆臭い……。うん、面白いよ」

確かに面白い。面白い味だが……また腹を壊しそうだ。もうあんな

「……はや……です！」

何か声が聞こえる。……まさか俺、アレを食って死んだのか？ はあ……だから食うの嫌だったんだ。未練しかないけど死んじまったらしょうがないよなあ。

「おー……、……さーい！」

うるさいな……天国ってのはこんなに騒がしい所なのか？ いや、そもそも「ごど」？ 真っ暗なんですけど。

「……君ー……起き……」

あ、そっか。目閉じてるのか。そりゃ暗いハズだわな。

「あわ……ごっ……？」

さてさて、「ご」のうるさい奴らはどこのどいつだ？ 説教してやる！

「お前らさっきからうるせーんだよー！」

そして、目を見開いてそいつらの顔も見ずに怒鳴ってやった。

「…っ」

「おっど」

「きゅっ」

「っ!？」

「ってあれ？」

良く見ると綾瀬達だった。結構大声を出してしまったせいかなり驚いているようだ。

「悪い悪い。お前達だとは思わなくてつい大声出しちまった」

「? じゃあ誰だと思ったですか」

「ここじゃ今は私達しかいないよね？」

「うん。あれから誰も通ってないえー。な、のどか」

「くくくく」

周りを見渡すと本棚が至る所に沢山……どうやら図書館島のような。でも変だな……。

「俺は確か商店街の方にいたはず……」

「はい? 何を言ってるですか?」

「私達ずっとここにいたよ? ねえ、二人とも」

「うんうん」

「くくくく」

ずっと……？　って事はさっきまでの……

「夢……か？　ハハ……良かった」

死んでなくて良かった。でも……あの味はかなりリアルに感じたんだけど何でだろう？　……考えない方が良い気がする。

「大丈夫ですか色々」と

「ん、変な夢見た事以外は大丈夫だぞ」

とりあえず寮に戻ったら鷺崎の野郎をぶん殴る。これ、確定事項。

「やっぱちょっと強くやり過ぎたせいかしらねー」

「？　何をだ？」

「君が壊れたから殴ったのよトンカチで」

しれっと答えるバル。……なるほど、そりゃ悪夢も見るわ。

「……何か怒る気も起きない。と言うか今日はもう帰りたいんだが」

「そうですね……。今日はここまでにしておきますか。二見さんのためにも」

「そうね。これ以上何か起きたらヤバそうだし」

「せやな」

「くくく」

そうして今度は何も触れずに綾瀬達の後ろからついていき……特に何事も無く無事に戻って来れた。

「んじゃ、俺は帰るな」

「はい、ではまた来週です」

「まったね〜」

「ほなな〜」

「さ、さよならー……」

図書館島を後にし、帰路につく。

「あ、一応なんかジュース買っていくか」

帰り際、ふと思いついたのでMAHORAドリンクを買いに行った。

「んー……買ってない味あるかな」

自販機を見つけ、MAHORAドリンクを探す。

「お、これ見た事ないな」

『443ドリンク187味』か。一応今日までのリストを確認して……っど。

「うん、無いな。ちゃんと学園長の分も買つとかないとな」

後日、苦笑しながら飲んだ学園長は腹を壊したそうナ。

「ではでは、いただきまーす。ごく……………」

ふむ、喉越しはトゥルトウルで、口に入れた瞬間魚の生臭さが鼻を刺激する。味はおそらく書いてある通り187（岩魚）なのだろう。さらに443（シジミ）で取った出汁も入っている。しかしこの二つの味がかみ合う事は無く、むしろ喧嘩しているな。貝と魚は合わないのだろうか…………？ 面白い。これだからMAHORAドリンクはやめられない。

「おや？ ラベルの横に『3MX様より』？ ああ、作者の関係者ね」

なら俺から言える事は何も無い。寮に帰るとしよう。俺はノートに情報を書き込んでその場を後にした。

5 時間目 再来する悪夢（後書き）

パ「パルと!」

の「のどかの」

パ・の「5時間目座談会」!

パ「いや、さすがに二見君から「止めてくれ、死ぬ、死ぬううううう!」ってうわ言聞こえた時は駄目かと思つたわ」

の「そ、そうだね……」

パ「あ、そういややっと二見君つて名前に収まったんだっけ?」

の「こくこく」

パ「暴露しちゃつと、名前決まるまで次話は出さない。つて意地張つてたのよね作者」

の「え、そ、そうなの……?」

パ「そうみたいよー? ったく、とりあえず次話出して後で差し替えりゃ良いのにねえ?」

の「わ、私に言われても……」

パ「ま、そりゃそつか。 んじゃ、今日はここまでかな。また次回でチエケラツ!!」

の「し、ししし失礼します」

主人公の名前が決まったので全体的に加筆・修正を加えておりますことをここで発表しておきます。

6 時間目 きつと男子寮ってこんなノリ（前書き）

今回は男子寮でのお話となりますので図書館探検部の面々は出てきませんが悪しからず。

6時間目 きつと男子寮ってこんなノリ

俺は寮に帰るなり、自室には戻らず鷺崎の部屋をノックする。あいつはこの時間帯なら確かバイトは入ってなかったから部屋にいるはずだ。

「ほーい。誰」

「くたばれクソがあああっ！！！」

ドアが開き、鷺崎の顔が見えた瞬間にフルスイングで拳を見舞う。

「ぶろぱっ！？」

「じゃあな」

「待て待て待て！！ 二見、いきなり何するんだ！」

「やかましい！ 5時間目を見やがれ！」

こいつのせいで俺がどれだけ酷い目にあっただか……。これくらいは当然の権利と言えよう。

「あ？ 意味わかんねーって！ 何で俺いきなり殴られないといけないんだよ！」

「……あのな、お前は夢遊病でいきなり俺に殴りかかって来たんだ。だから仕返しに来た」

うん……さすがにこんなんで信じるバカなんていないか。他に何か……

「そうか……。それなら仕方ないか。悪かったな記憶ないけど殴りかかって」

信じちまったよこのおバカさん。

「おう。じゃ、また明日な」

「ああ」

……ま、いつか。部屋に戻ろう。

「ただいまー」

「おー、おかえり。今日は遅かったんだな」

出迎えてくれたのはルームメイト兼クラスメイトでもある武村。普段は悪い奴ではないんだけど……。

「ちょっと図書館島に行つててな」

「図書館島に？ またなんでさ」

「ああ、知り合いの女子が図書館探検部」

「女子だと!?!」

ああ やっちまった。こいつは異常に性に目覚めたド変態で、中

一の分際でこの部屋にエッチな本を持ってくる。目のやり場に困るからホント止めて欲しい……。んで、中一の癖にたまに女生徒を口説いているどうしようもない奴（成功したと言う話は聞いたことがない）なのだ。当然、女子の話題を出すとアホみたいに食いついてくる。

「待て待て、大事なのは図書館島の」

「女子以上に大事な話なんてあるか!!」

……もう寝ていいかな？ まだ夕方だけ。

「や、いっぱいあるだろ」

「ない！ つかお前いつの間に彼女を……!!」

「知り合い……じゃないな。友達だよ、友達」

「女の子と友達」彼氏彼女の関係だろおおおおっ!?!」

こいつ、既に末期だ。

「じゃ、俺風呂行ってくるから」

これ以上関わらない方が良くないと思い、俺は部屋を出る事に決めた。

「あ、待てよ！ 俺も行くぞ」

「お前が入ると風呂がエロくなるから来るんじゃない」

「意味わかんないし!? まあ、俺が風呂でさっきの続きを聞かせ
てやるからさ。安心してくれ」

むしろ不安だっつーの。

「止める。さもないと殴る蹴るの後に寮の裏側に全裸で放置するぞ」

「…………ごめんなさい。今日は止めときます」

…………今日は?

そんなバカ話をしているうち、大浴場に着いた。

「あ、そうだ」

そっぴや更衣室に自販機あったよなあ…………。ノートは持ってきてな
いから帰る時に買って行くか。

「ん? どうかしたのか?」

「いや、帰りにジュースでも買って行こうかなって思っただけだよ」

「ふーん。なあ」

「嫌だ」

こいつが次に何を言うかなんてわかり切ってる。いつも趣味に金使
うから他人にジュースやら何やら奢らせようとする奴だからな…………。

「酷っ! 俺まだ何も言っていないのに…………」

「どうせ審ってくれとか言うつもりだろ？」

「うん」

「さて、さっさと入るか」

武村をスルーして浴場のドアを開く。

「いや、いつ来ても広いなあー」

ほんと、大浴場って言葉が相応しいよな。

「おや、二見君じゃないか」

「え？ あ、中林君か」

俺に話しかけてきたのは見事な七三分けとシャープな眼鏡が特徴の中林君。彼はホント頭が良いのでテストの時は度々お世話になっていたりする。てか、風呂の中でも眼鏡かけてるのか。

「ここで会うのも珍しいね」

「ま、部屋があるから大浴場なんてあんま来ないし」

「はは、確かに。でも僕は毎日この時間にここで入ってるよ。どうも、部屋のは落ち着かなくてね」

「そうなんだ？ 俺は気分だからなあ……」

一応風呂自体は毎日入ってるけど、部屋にもあるしそこまでここは

利用しない。広くて気持ちいいけどな。

「それで良いんじゃないか？ 僕はこのペースが一番しっくりくるからそうやっているだけだしね」

「そっか」

「ああ。それより君に言いたい事があるんだが……」

「……うん、言わなくても分かるけど言ってみて」

「100%あの事だろうなあ……」。

「それじゃあ遠慮なく。……さつきから浴場を泳ぎ回っている武村君、どうにかならないかい？」

『いやっほ』

『い！』

と、泳いでいるバカを見る中林君。

「えっと、桶貸してくれる？」

「分かった」

中林君から桶を受け取り

「あつ、全裸のお姉さんが入ってきた！！」

「なんだって！？」

「沈め！」

奴が食いついた瞬間に桶を被せてお湯に沈める。

「がぼがぼごぼぼっ！！??？」

「10〽、9〽、8〽」

しつかり10まで数えないとな。体を温めないよこの時期は風邪ひくし。ああ、俺ってなんて親切なんだろうか。

「7〽、6〽、5〽」

「……」

「二見君、ちょっといいかい？」

「4〽、ん？　どうかした？」

「武村君だが……息しているのかい？」

「そう言われてみれば大人しくなったな」

さすがにやりすぎたか……？

「とりあえず……おい、生きてるか？」

桶を外して変態の生死を確認する。

「ぶはあっ！！　おい、二見！　全裸のお姉さんはどこにいるんだ

「!?」

「さて、中林君。あがるか」

「ああ。そうしよう」

俺達は変態を一人残し、大浴場を出る。浴場から「お姉さん!!」とか聞こえているが無視だ無視。

「さて、ジュースジュース」

俺は小銭を出して、自販機へ向かう。

「二見君、あまり無駄遣いは感心しないな」

「違っつて。これも部活動なんだよ」

ふと思ったんだけど、卒業までに終わるのだろうか……。ま、あればあるほどいろんな味が楽しめて良いけどさ。

「部活動？ ジュースを飲むのがかい？」

「おう。MAHORA不思議ドリンク研究会ってんだ」

「不思議ドリンク……ああ、アレか」

「なんだ、結構知ってる人多いんだな」

もってマイナーかと思ってた。

「……正直な話、アレを飲むのは辛くないかい？」

「え？　なんで？　めっちゃ面白いじゃん」

あんな面白い飲み物他にないと思うぞ？

「いや、まあ……君が良いなら良いのだけど。くれぐれも体には気を付けるんだよ？」

「大丈夫だって。不思議食べ物シリーズじゃない限りな！」

アレだって面白い………だけど！　体に直接クから嫌なんだよな……。中林君と別れ、自販機の前に立つ。

「んー……お、『塩タントマト（小豆入り）』か。また面白そうなもんが置いてあるじゃん。買いだな」

硬貨を投入し、俺と綾瀬と学園長の分を購入する。ふふ、みんな喜ぶぞ！

頬を引きつらせながら飲んだ学園長はそれから一時間、お手洗いから出てこなかったとか。

あと、『ザンレイ様より（大幅なアレンジをお許しください）』って書いてあつたけどこれは今日良く見かけるので気にしない。

「ふんふんふんーん」

「二見iiiiiiiiiiii！」

「さーって、今日はさっさと寝て明日に備えるかな？」

図書館島じゃ色々あって疲れたし……。

「普通にスルー!？」

「え? あ、お前いたのか」

「大声で呼んだよね? 俺呼んだよねえええ!」

「うるさい黙れ」

やたら顔を近づけてくる武村に裏拳を入れる。

「っ! っ! っ!」

「おっと、寝る前にドリンクを冷蔵庫にいれとかにや」

まー、来週には存在自体忘れてるかもしんねーけど。

「た、頼むから話を聞いてくれ……」

「あ? 3秒以内な」

「お姉さんがいなかった!」

「……」

よし、寝よう。さっさと部屋帰ってマッハで寝よう。

「あぁっ! 待ってくれよー! ルームメイトだろぉ〜〜」

「うるせえなあ……あ、そうだ。さっき金髪で胸の大きいお姉さんがお前に話があるって呼んでたぞ」

無論、嘘だ。

「え、マジ？ いや、困っちゃうなあ。じゃっ、行ってくるわ！」

「真性のバカだったか……」

俺は部屋に戻り、カギをかけた。

「ドリンクを冷蔵庫に入れてっと。さー、寝るぞ」

電気を消し、ベッドに潜り込む。

「あ~~~~。今日はホント疲れたあ……」

まさか臨死体験までするとは思わなかったしなあ。今日……というか図書館島を思い返すと不幸な思い出しか蘇らない……。ま、でももうあそこに行く事は無いだろうがな！ それに行ったとしても奥に進まなきゃ済む話か。あの罫の数には正直驚いたけど……あれだけの罫を図書館探検部はだいたい把握してるんだよな？ すげえ……俺は多分、毎回ひっかかる。

「……ってもう23時かよ。……いい加減寝るか」

明日は朝から新田の国語だし……。ただでさえ眠くなる授業だったのに睡眠不足の状態で授業受けたりしたら100%寝るに決まっ

てる。そしてそのまま正座コース一直線だ。あれだけは何としても避けたい。

「……あれ？　そっぴやなーんか忘れてるような気が……」

だが、結局思い出せなかったの俺はそのまま夢へと旅立った。次の日、武村がお姉さんが来なかったとか言って泣いていた。どうやら一晩中待ってたらしい。　　あ、嘘だって教えるの忘れてた。

6時間目 きつと男子寮ってこんなノリ（後書き）

パ「パルと!」

の「の、のどかの〜……」

パ・の「「6時間目座談会〜」」

パ「まあ……今回は男子寮の話だったから私達は何をすれば良いのかさっぱりなわけだけど」

の「う、うんー……」

パ「えっと、とりあえず作者からパクった資料によると、今日は二見君のクラスメイトが出てきたみたいね」

の「そ、そうなんだー……」

パ「さらに二見メモによると……武村：とても変態。中林：とても頭が良い。鷺崎：とてもバカ。だそうよ」

の「……（そのメモ勝手に持ってきて良かったのかなー……?）」

パ「って、こんな抽象的なメモで分かるかー……っつっ……!!
ええい! こうなったら実地調査よ! 良いわねのどか!」

の「はひゃい!? な、なんで私までー……」

パ「のどか、一蓮托生って言葉知ってるわよね?」

の「し、知ってるけど……でも男の人は私……」

パ「大丈夫大丈夫。ちゃんと夕映とこのかも連れて行くし」

の「（そう言う問題じゃない気が……）」

パ「てなわけで、次回も張り切って行くわよー!!」

の「はあー……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3819t/>

MAHORA不思議ドリンク研究会

2011年10月13日16時51分発行